

芸術に心奪はれ、
女と男、純な愛を知る…。

ヴェネチア映画祭特別招待作品

ミシェル・ピコリ/ジェーン・バーキン/エマニュエル・ベアール
ジャック・リヴェット監督作品

いさか

め 美しき諍い女 ディヴェルティメント

原作○オフレド・バルザック「知られざる傑作」(岩波文庫)/脚色○ジャック・リヴェット+パスカル・ボニヴェール+クリスチヌ・ロラン/編集○ニコラ・リュブチャンスキー
絵画○ベルナルド・トピノ/音楽○イゴール・ストラヴィンスキー 12人のためのバレエ「アゴン」より第1曲と終曲(ハンス・ロスホー指揮)
撮影○ウィリアム・リュブチャンスキー/美術○マニュエル・ジョウニ/衣裳○ロランス・ストリュス/制作管理○ジャン・クルウワ/製作総指揮○マルティヌ・マリニャク
1991年フランス映画/イーストマンカラー/2時間11分/スタンダード(1.33) PIERRE GRISE PRODUCTIONS+FR3 FILMS PRODUCTIONS+GEORGE REINHART PRODUCTION

FESTIVAL DE VENISE 1991

La Belle Noiseuse
DIVERTIMENTO

ディヴェルティメント
リヴェット監督自らが新たな結末を用意したもうひとつの“諍い女”。
マリアンスの「クン」の声で閉じられた4時間版のラストの後には、
クワズニス
真実の“諍い女”の姿があった…。

© PIERRE GRISE PRODUCTIONS 1991

配給 ▶ コムストック + テレビ東京 12 / 後援 ▶ 11M、TOKYO FM + フランス大使館

『美しき諍い女』が3万人を越える動員を今なお続け、4時間という長尺のものとしては記録的なヒットを更新中だという。なんと時代は変わって来たことか……。かつて『狂気』や『セリーヌとジュリーは舟でゆく』によって、ジャック・リヴェットこそ、現代最高の映画作家だと確信させられてから10年以上の月日が流れても、わが国のスクリーンに、その恐るべき映画の強度と、未知の世界へ跳躍しようとする初々しい衝動の共存する、リヴェットの映画世界が映し出されることはなかったのである。

しかし90年代、ようやく「時代はリヴェットのもの」となるようとしている。

そしてここに、もう一つの『美しき諍い女』、『ディヴェルティメント』が登場する。この版を最初に見る方には、キリリと引き締まった佳作と映るであろうが、大方の観客にとっては、なぜ、わざわざ4時間の短編をさらに短くする必要があるのか不思議に思われるのではない。

しかし、短縮版として見始める観客は冒頭からかすかな違和感に囚われるであろう。そして決定的な違いが察知されるのは、画家が若き画家とその恋人を連れ、ホテルを出ようとする場面である。砂塵が

舞い、マリアヌ（ペール）のスカートを揺らす突風の印象的な記憶を裏切るように、そこでは穏やかな日差しと微風がそよぐばかりだ。ここで疑問が確信に変わる、『ディヴェルティメント』は『美しき諍い女』の短縮版ではない」という事実……。

かつてリヴェットは2時間を越す大作「アウト・ワン」を、「スペクトル」として1/3に短縮する際、同じ素材を使いながらも、別の編集者を起用して、狙いの異なった別の映画へと変貌させた。今回はカットを熟知する同じ編集者によって、別の映画として編み上げようとする。だから、別のテイクを使って、作品の空気感、風土をも変えてみせるのだ。

とはいえ、半分に縮めても、同じ密度と時間経過が表現できるなら、逆に4時間版の意味が消えてしまうのではない。だからリヴェットは編集のポイントを創造の過程から、6人の登場人物の関係の推移へと大胆に切り変える。そのために未使用のテイクを繋ぐのみならず、切り返しや、寄り引きの関係で捨てられたカットの残りの部分を復活させている。

『ディヴェルティメント』では『美しき諍い女』で見られなかったものが見れるのだ。例えば、アトリエでアングルを探すピコリのロングで処理された持

続が、笑うペールのアップに変えられていて、台詞は同じながら、映画に一層の生々しさを加えてもいよう。

『ディヴェルティメント』は、『美しき諍い女』の模倣であり、パラレル・ワールドなのだ。「セリーヌとジュリーは舟でゆく」の出来事が反復される幽霊屋敷——セリーヌとジュリーが遠く離れた世界が、ここでは現実の観客の前に2本の作品という顔をまもって響かす。幻視者リヴェット！ また『美しき諍い女』の本物の偽物——画家ピコリの行為を映画作家リヴェットが模倣した軌跡——とも言えよう。

『ディヴェルティメント』を見ることで、なぜ『美しき諍い女』でラストのパーティが集団で映される事なく、二人ずつの組み合わせで、フレーム・イン、アウトを繰り返したかも理解されるだろう。ペールの「ノン」の声で閉じられた4時間版のラストの後に、ほんものあるいは偽物のラストが続く。ここではリヴェットの六重奏の原因と結果とが転倒し、『美しき諍い女』の批評でもあるリメイク=フェイクとなっている。リヴェットの大嫌いな言葉であるはずの「テーマ」主義的な観客を襲う、軽やかなリヴェットの「気晴らし」でもあるのだ。

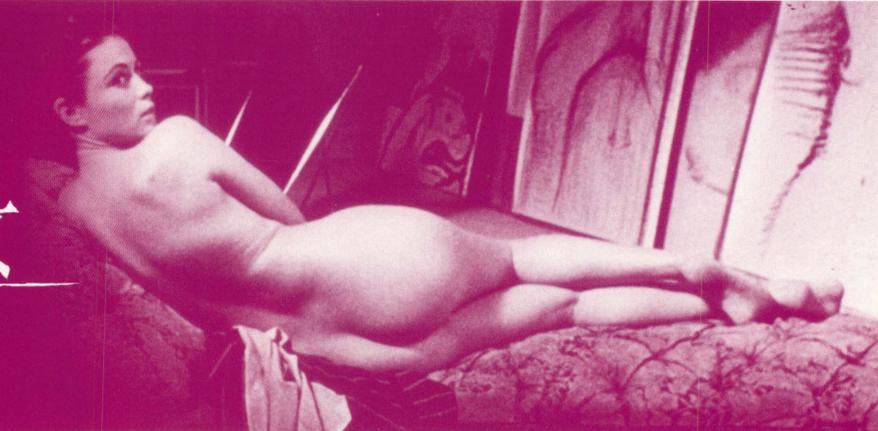
ヴェネチア映画祭特別招待作品

ミシェル・ピコリ/ジュゼッペ・パネッリ/エマニュエル・ペール
ジャック・リヴェット 小沢作品
いさか

美しき諍い女

ディヴェルティメント

FESTIVAL DE VENISE 1991
La Belle Noiseuse
DIVERTIMENTO



「ディヴェルティメントは、4時間版の短縮版ではない。分身と失墜というテーマで組み立てられている。時間を変化させ、強調する場所を変えてみる。こうした演技の観点から見て、どちらの版が好きかを言うことは、私にはできない。」

ジャック・リヴェット(談)

そもそも『美しき諍い女』は、2つのテレビ局との共同製作だった。一方のカナル・ブリュスは4時間版を放映し、もう一方のFR3が2時間版を放映するという契約で、当初FR3は私の映画を警戒していて、契約条項に2時間のヴァージョンを作ることが盛り込まれていた。

そうした経緯の下で編集がスタートした2時間版だったが、出来上がったその2時間の『美しき諍い女』も完全に私の映画だし、否定するものではない。4時間版と2時間版とは編集が完全に異なっているのだ。従って、2時間版は、4時間版の短縮版ではない。もちろん同じ話なのだが、2時間版の編集は分身と失墜というテーマで組み立てられている。

分身というテーマでもう一度組み立ててみることに面白さを感じたのは、編集を担当したニコル・リュブチャンスキーと私の目から見て、役者たちのそれぞれの演技がテイクによって非常に異なっていたからだ。特にミシェル・ピコリがそうだった。

そうやろうと決めたのは4時間版が完成した後のことで、2時間版では、コンティニューイティの面から見て、少し方向が異なっていて完全に総括されているとは言えないテ

イクを見て、もう一度やろうと思った。そうしたテイクが一体どんな場所へ私たちを連れて行ってくれるのか知りたかった。

もちろん別の物語が語られるわけではなかったが、その語り方が違うのだ。4時間版を一枚のタブローの物語とするならば、2時間版はフレンホーフェルとリスとマリアヌの物語になっている。

2時間版では、最小限の切り直しだけを使って、あるシーケンスからは切り直しだけの部分を取り去って作ってみようと思った。たとえば夕食のシーンは4時間版ではかなり編集されているが、2時間版ではたった2つのショットで済ませてしまった。だが、もちろん、この原則をすべてのシーンに適用することはできなかったから、そうした場合は、ミシェル・ピコリの場合に当てはまるように、別のテイクを使ってみることが効果的だった。彼は各々のテイクで自分自身を変えてしまう役者だ。

時間を変化させ、強調する場所を変えてみているのが2時間版だ。こうした演技の観点から見て、どちらの版が好きかを言うことは、私にはできない。

(「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン 第3号」より抜粋、再構成しました)

9月26日(土)より特別限定ロードショー決定!!

※『美しき諍い女/ディヴェルティメント』は、今回限りの上映となります。どうぞお見逃しのなきよう、上映日程にご注意下さい。

上映時間 11:30 2:00 4:30 7:00 (終映9:20pm頃)

●特別鑑賞券¥1,400発売中(当日¥1,700均一)

●お得なセット券(¥2,900)なら、『美しき諍い女』(3時間57分版)と

『美しき諍い女/ディヴェルティメント』があわせてご覧になれます。

●9月5日(土)から25日(金)まで『美しき諍い女』(3時間57分版)をアンコール・ロードショーいたします。この機会に是非あわせてご覧ください。詳しくはコムストック(☎03-3403-0140)までお問い合わせ下さい。

●プレゼント 劇場窓口にて特別鑑賞券をお求めの方には、エマニュエル・ペールのプライベート生写真セット(非売品)をさしあげます。数に限りがありますので、お早めにお求めください。尚、この生写真セットは他では入手できません。

銀座シネパトス

銀座三越先・歌舞伎座手前 03(356)4660